

〔課題演習抄録〕

子どもが伸びを実感できる体育科指導法の研究
ー走り高跳びの授業を通してー藤 原 朋 美
Tomomi FUJIWARA福岡教育大学教職大学院教育学研究科教職実践専攻教職実践専攻教育実践力開発コース
小学校免許プログラム

キーワード：体育科，陸上運動，走り高跳び，個人目標，グループ学習，タブレット

Ⅰ 研究の目的

2018年7月に改訂された，小学校学習指導要領解説体育編で「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力」「学びに向かう力，人間性等」については課題を見付けその解決に向けた学習過程を通して相互に関連させて高めることが重要であると示されている。特に運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮するよう明示されており個に応じた授業の必要性や他者とのコミュニケーション能力の育成から協働して動きを向上させることが求められていると考える。これを踏まえて本主題を設定した。

本研究は，「仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学習」の研究から，課題を共有したり，学習したことを広げたり，深めたり，互いの伸びを認め合ったりする学び合う活動である「シェア活動」を取り入れることでアドバイスや動きを付加修正・強化し児童のもつ認識性，身体性，主体性を高めることができる（藤木，2017）ことから，本研究では，個人目標設定とグループ活動，タブレットの利用の3つの視点に重点を置き運動が苦手である児童や意欲的でない児童を含め自己の成長の伸びを実感できるようにすることを目的としている。つまり本研究の目的である自己の成長を実感する授業とは，「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の3つ力を児童が学び続ける力の育成として授業の中で明らかにするものである。

Ⅱ 研究の計画

Ⅰ. 対象及び期日

宗像市の公立H小学校にて5年生55名（男35名，女20名，2クラス）を対象に，5時間単元の走り高跳びの授業を実施した。授業はクラスで異なる時間に行い，2018年10月17日から11月1日にかけて行った。

Ⅱ. 研究方法

本研究の方法は体育授業に対するグループ活動への愛好的な態度の変化を見るために本単元の前後に診断的・総括的授業評価尺度（高田・岡澤ら，2000）と，体育授業における形成的授業評価尺度（長谷川・高橋ら，1995）（以下仲間意識に関するアンケート）の2つのアンケートを行った。仲間意識に関するアンケートでは個人目標設定が自分に合っていたか，タブレットを使用して効果があったかの問いを追加し4件法の選択回答で行った。

また，仲間意識の変化についてのアンケートでは，自由回答として「だれに」「どんなアドバイスをもらいましたか」という問いを付け加えた。さらに，チャレンジタイムが行われた2時間目から5時間目の個人記録を得点化した変化値（以下個人記録の変化値と記す）を個人記録の伸び率として変化を分析考察した。アンケート以外では，ビデオ等の録画記録を使って分析を行った。

Ⅲ 研究の内容

個人目標の設定する方法では，池田ら（1987）が研究で用いた走り高跳びのノモグラムを利用し7点を目標記録に設定し各記録を得点化して変化を比較した。その際，昨年（2017）では目標の高さや50m走のタイムが児童の実態に合っていないことがあったため，高さを10cm低くし，50m走のタイムを0.5秒遅くした。

本単元を通して記録の伸びやその過程で行われるアドバイス等の教え合いをアンケートや学習プリントを用いて検証した。昨年，実施した単元指導計画を基盤に今回の単元を作成した（図1）。

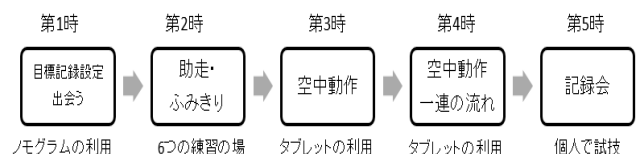


図1 本年度の走り高跳びの単元の流れ

変更点として、今年は着地というポイントを助走に変更して、3つのポイントを1・2時間目に紹介し3・4時間目でタブレットを用いてグループで空中動作を見直すことを取り入れ重点的に練習した。また、授業の流れとして導入で必ず、本時のポイントを説明する前に前時で良かった動きを紹介した。タブレットを使った第3・4時では動きをグループで確認した後にチャレンジタイムで自分の記録に挑戦するように図った(図2)。

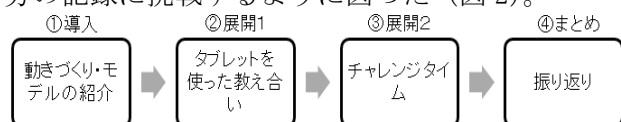


図2 第3・4時の授業の流れ

空中動作を練習するときにアドバイスのものさしとして「空中動作見直しカード」を用いて自分が、どこができて、どこができていないかの認識化を図った(図3)。

レベル1	うでがさがっている
レベル2	片足でとんでいる
レベル3	ひざがさがっている
レベル4	つま先がさがっている
レベル5	おしりがさがっている
レベル6	ひざとつま先がさがっている
レベル7	ひざとつま先とおしりがさがっている

図3 空中動作見直しカード

4 成果と課題

I. 結果

チャレンジタイムの記録を得点化した平均の推移は以下のとおりである(表1)。

表1 毎時間のチャレンジタイムの平均得点の推移

1組	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目
チャレンジタイムの平均得点(点)	3.74	3.74	3.33	3.93

2組	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目
チャレンジタイムの平均得点(点)	4.33	4.00	4.62	4.14

表1から1組は5時間目、2組は4時間目に高いことが分かった。また、表1のチャレンジタイムを通した内訳は以下の図4に示す。

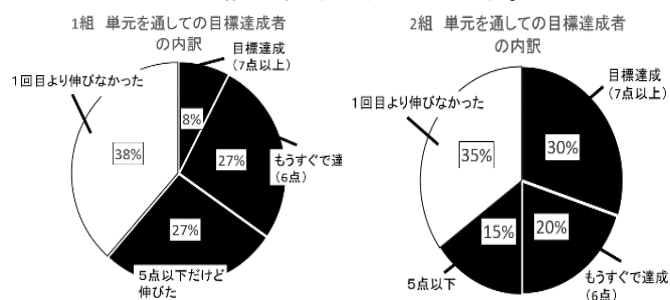


図4 各クラスの目標達成者の内訳のグラフ

図4から各クラス、目標達成者は3割未満であ

ったが1回目より伸びた児童は6割以上であった。

「体育授業のグループ活動に対するアンケート」について2クラスとも事前で行った時より事後の方が上昇した。1組は、「①本時のめあてを達成することができたか」「②グループで満足感を味わえたか」という問いに対する自己評価が高かった。2組は、「③友達の意見に耳を傾けることができたか」「⑦グループがひとつになったように感じたか」という問いに対する自己評価が高かった。「仲間意識に関するアンケート」についても全体的に事後の方が高かったが特に、今回の手立てとして「⑩1時間目につくった個人目標記録が自分の目標に合っていましたか」「⑪タブレットをつかった練習は自分の目標達成につながりましたか」という問いに対し各クラスともに上昇した。

II. 成果

成果として、結果を踏まえて2つある。1つは、個人競技におけるグループで技能について話し合う必要性である。昨年も同じようにグループ活動を行ったが技術練習が多く話し合う時間が少なかったため、あまり技能の改善には至らなかった。今回グループでの活動と同じようにタブレットを媒介に話し合う場を設けた。すると学習プリントから自分は何ができていないかを把握したような記述や言動が多くあり、どうしたらできるようになるのか模索するような練習の姿が見られた。

2つは、児童の実態を把握した個人目標設定の重要性である。今回、昨年より目標がやさしくなるよう設定を行った結果、学習プリントを回収した46人中8人の児童が目標を達成することができ、約5人増えた。また、特に目標達成者数が多かったクラスでは、「仲間意識に関するアンケート」結果でも「⑩1時間目につくった個人目標記録が自分の目標に合っていましたか」という値が高かったことから改善したノモグラムがそのクラスに合っていたと考える。

III. 課題

課題として、前年度のノモグラムを改善したにも関わらず全体での達成率が17%と数値が低い結果となってしまったため、今後達成率を30~40%にできるよう実態把握と実態に沿った基準で設定したいと考える。

主な引用・参考文献

- 長谷川・高橋他 1995 小学校体育授業の形成的評価及び診断基準作成の試み
高田・岡澤他 2000 体育授業評価法の作成
文部科学省 2017 小学校学習指導要領解説体育編
藤木 2017 仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学習